

第四章

ラソニングスルー

平成元年七月から平成二年六月までのできごと

新チーム構成メンバー

二年生	一年生	平成二年度新入生
マネージャー 眞鳥（富江中）	マネ 溝越（淵中）	マネ 生島（淵中）
選手 主将 田端（清水中）	選手 松山（清水中）	マネ 西村（戸町中）
選手 岩永（諸富中）	選手 浜口（深堀中）	選手 一瀬（長与中）
選手 山崎（時津中）	選手 松尾（長崎中）	選手 山口（深堀中）
選手 池田（横尾中）	選手 山口（横尾中）	選手 山川（山里中）
選手 藤原（桜馬場中）	選手 川原（深堀中）	選手 川迫（東部中）
選手 江頭（横尾中）	選手 白浜（真城中）	
選手 岡田（岩屋中）	選手 松下（戸町中）	
選手 城添（山里中）		
選手 橋本（大瀬戸中）		

百円玉

夏休みに入って間もなく小島純子がやってきた。

「先生、はい」

私の前にさし出されたのはキャンディの缶だった。手に取るとずしりと重い。

「なに、これ？」

「へへん 饞別です」

「え？」

「貯めたんですよ。元旦から毎日百円ずつ」

「……」

「今年は絶対勝つと思いましたがね、元旦から毎日百円ずつ貯金したんです」

ふたを取ると中には百円玉がジャラジャラ入っていた。そして私は、しばらく声がでなかった。

小島は、会社から帰ると毎日、

「インターハイ。やっと、念願のインターハイ」

そんな思いを込めてこのキャンディの缶に百円ずつ入れてきたのである。その、小島のやさしい心づかいに感激し、何かしゃべれば涙が出そうだったので、私は缶をながめまわしたりゆすってジャラジャラいわせたりして時間をかせいだ。そして、

「ありがと」

やっとそれだけのセリフを言った。

小島は第一章『屈辱の船出』に登場した。そう、卒業式の前日、私といっしょにフルマラソンに挑戦した彼女である。その後彼女は地元の実業団チームに進みバスケットを続けている。そして今年が三年目だ。不運と言えば彼女ほど不運な選手もいない。なにしろ、春季選手権では優勝しておきながら高校

総体では一回戦で負け、鶴鳴の歴史に残るワースト部門の記録を作ってしまったのだから。私が小島だったら自分の不運をのろい、今年の優勝に対して少々のねたみ心を持ったかもしれない。

「いい選手が集まったんだから、勝つのがあたりまえよ。私たちの頃は圧倒的に相手の素材がよかつたんだから」

とかなんとか言ってる。

しかし小島は、私なんかと比べて人間のできが違う。鶴鳴が優勝したことを心から讚え、心から喜び、こうしてかけつけてくれたのである。彼女が帰った後私はそのキャンディの缶をみんなの前に持ってきて言った。

「この缶の中にはお金が入っている。百円玉で二万一千二百円だ。リサが今年の元旦から毎日百円ずつ貯金したお金だそうだ。インターハイの饞別にしようと思ってね。会社から帰ると毎日、『インターハイ』『インターハイ』と言いながら、カチャンカチャンって、この中に入れたんだって。俺は、ハイそうですかって、このお金を使えやしないよ。これはこのままとっておくからな」

勝てばこうしてお祝や饞別をもらうことが多くなる。そのお祝や饞別も、お金だったり品物だったり県外から届いたり地元の先輩が届けてくれたりとさまざまだ。みんな、それぞれがそれぞれの思いを込めてやってくれることだから有難いことである。

しかし、この小島のキャンディ缶には、ただ有難いというだけではなく私は胸が詰まった。人が人と思うというのは実に美しいことだ。そして思いを込めるという行為は人を感激させる。私はこの小島の行為に感激した。そして、「俺は小島ほど自分の選手のことを思っていてやるだろうか」と思った。

ボイコット

七月の期末テストが終わって間もなく、その日は土曜日だった。市内にある短大と練習試合をすることなっていて、それぞれ準備ができ次第出かけていった。私は例によって走っていた。私が短大に着いた時、三年生と一年生はすでに到着していてユニフォームに着替え、準備をしていた。しかし、二年生の姿がなかった。

「二年生は？」

と私が聞く

「東小島からバスにのったんですが、『あんた達先に行って』と言われて私たちだけ先に来まして」と一年生が答えた。答える一年生の顔にも何か不安が漂っていた。

「どこ行きのバスに乗ったんだ？」

「時津行きです」

私は直感的に、二年生達は集団でボイコットしたのだと思った。それは短大に行くのに乗るバスではない。方向が違う。それでも、もしかして何か用事があったのかもしれないと思い、しばらく待った。しかし、結果は同じだった。私は短大の監督に事情を説明して詫び、選手達にはまた学校へ戻るように指示して自分も再び走って帰った。学校に戻ると眞鳥と城添のふたりが泣きながら部室で待っていた。ふたりとも二年生である。

「どうした、他の連中は？」

と私が聞くと、眞鳥が事情を説明した。その内容は次のようなものだった。

実は、その日の朝から二年生の間では放課後ボイコットするという相談が持ち上がっていた。でも、眞鳥は本気にはいかなかった。口には出して言うけれど、まさか本気で実行するとは思っていなかった。

たのである。ところが放課後、「やるよ」と言われて、驚いてまごまごしているうちに置いて行かれたと、かいつまんで言うてほしいこんな経過である。

私は短大から選手達が戻って来るまで待つて、みんな揃ったところで事情を説明した。そして、一年生は帰宅させ、三年生には地区を割り当てて探索に当たさせた。連絡の方法は、それぞれの出先から体育館に電話をさせることにした。真鳥と城添は部室に待機させ、私も体育教官室でそれぞれの連絡を待った。

三時間ほどして連絡が入った。ボイコットした二年生は皆、チヨ（池田）の家に集まっているらしいという情報だった。私は定期的に入ってくるそれぞれの連絡に対して、見つかったからすぐ学校に戻ってくるよう指示して、ボイコット組にはまた別に電話をした。

「チヨか？……みんな居るだろう。……これからすぐ全員学校に戻って来い。話はそれからだ」
相前後して帰ってきた探索組には労をねぎらって、後は私が処置することを伝えて家に帰した。それから待つこと約一時間半。暗い表情でボイコット組が帰ってきた。夕方七時近かった。私はその連中を体育館に集めて話をした。

「今回のことで、ボイコットした理由が何なのかを俺は聞くつもりはない。言いたいことはふたつある。ひとつは、このボイコットが俺だけへのいやがらせに終わったのではなく、事前にわかっていたはずの短大との練習試合に穴を空け、鶴鳴バスケットの内部のことには関係のない他人にまで迷惑をかけたこととおまえ達の俺への不満がいかなるものであれ絶対に許せない。

もうひとつは集団でやったことだ。一人ひとり個人でやったのなら私も少しは考えたかもしれない。しかし、おまえ達は集団でやった。おれはこの『赤信号、みんなで渡れば怖くない』式のやり方や考え方が大嫌いだ。あと二週間もすればインターハイへ出発する。だからできるだけ早く決着をつけなければならぬ。これから誰にも相談せずにひとりになって考える。そして本当にやめるのか、それとも明日からまたやるのか、返事を持って来い。俺は体育教官室で待っている」

私は体育教官室でじっと待った。ずいぶん時間が経ってから藤原がノックして入ってきた。

「すみませんでした。私はあまりうまくありませんが、これからがんばってやっこうと思っておりますのでよろしくお願いします」

うまくないどころではない。藤原は充分戦力になる選手だった。

「うん、わかった。明日は九時半からだ、今日と同じ短大で試合だ」

私はそう言って藤原を帰した。それを皮切りに、数分から十数分おきにひとり、またひとりと、ノックして入ってきては自分の意思を私に伝え、帰って行った。その中で、山崎・岡田・江頭の三人はもうやめると言った。私は、やると意思表示した者、やらないと意思表示した者のどちらに対してもその場では「うん、わかった」という返事だけで帰した。最後のひとりも済んだのは午後九時を過ぎていた。

翌、日曜日は九時半から同じ短大で練習試合だった。そこには、山崎・岡田・江頭以外の者は全員来ているはずだったが田端の顔もなかった。私がそれに気付くのとほとんど同時に、

「グルはほんのそこまで一緒に来てたんですが、『私やっぱりダメ』と言って、戻りました」

と、同じ寮生である真鳥が言った。私はバイクに飛び乗り、田端がまだそこらへんの電停でうろろしているかもしれないと思って急いで捜しに行ったが田端の姿はどこにも見当たらなかった。しかし、田端がいなくても他のメンバーは戻って来たので、今度は相手に迷惑をかけずにその日は試合ができた。

田端は結局、その日の夜には寮に戻って翌日は学校にもちゃんと来た。そして、練習にも参加した。で、どこにいたのかというと、お姉さんの勤め先に行って時間をつぶしていたのである。理由は、どう

しても気が重くて練習に出る気持ちになれなかったのだそうだ。

残りの三人についても、このまま放っておかない。電話および家庭訪問でそれぞれの親に、絶対にやめさせることのないよう頼んだ。その際、自分の娘がしてかしたことをひどく私に詫げる親もいたが、私に何か言いたそうな親もいた。しかし私は、こうなった経緯やその背景にある原因などを選手から母親からも聞く気はまったくなかったし、もし何か言われたとしても詫びたり改めたりする気はまったくなかった。

昔、よくこんなゴタゴタがあったが、その頃は選手がちょっとでもミスしたら張り手が飛ぶし、誰かが私に殴られない日はなかったほど、無茶苦茶な練習をやっていた。だから、選手がボイコット騒ぎを起こしてもほとんど私の方が詫びなければならぬようなことばかりだった。しかし、今の私のやり方に何の不満があると言っただ。しかも、よりによって他のチームとの練習試合が組まれている日に決行し、他人まで巻き添えにするとは許せない。「何か思い当ることはないの?」と、もし他の人から言われても、そんなわけで今回の場合は私の方から折れる気などまったくなかった。

しかし、ボイコット組のためにここで一言弁護しておかなければならない。それは、もし選手達がここで私の代りにペンを取っていたら私は逆に攻撃されるに違いない。そして、それを読んだ読者の多くが選手に同情するかもしれない。それはそれで、人それぞれに物の見方考え方の基準が違うのだからそれを否定する気はない。ここで書いていることはあくまで、私が私の体験に基づいた基準で書いていることなのだから。

事実、何年も立ってから眞鳥が、

「休みがなくて、ずっときつい練習が続いていて、あの頃選手達は結構参っていたんですよ」
そう言った。

それはまったく気付かなかった。今の私が昔と違うところは、いつ終わるか分からない練習は絶対にしないということだ。そして、選手を人間として見ているという(人格という観点からではなく、体力という観点で)点も昔と違う。本当に恥ずかしいことだが、若い頃の私は選手を牛や馬を扱うことく、過酷な練習を強要していた。だから、ボイコットを決行した選手達が、当時精神身体両面で追い込まれていたなどと、眞鳥から真相を聞くまでは考えてもみなかった。

しかし、眞鳥から言われたことを冷静に分析してみれば、当時の私は、有望新人を獲得できたということの有頂天になって舞い上がり、自分が描いたイメージにチームを近づけるために次々と無理な要求をしていたのかもしれない。

さて、夏休みに入って間もなく、相前後して三人が戻って来た。その前に、それぞれの親から「明日から練習に参加するでしょうからよろしく」という連絡を受けていたので、受け入れる準備はできていた。しかし、「すみませんでした。きょうからまた練習しますのでよろしくお願いします」そう言って戻ってきた者もいるし、黙って何のあいさつもなく、練習着に着替えてみんなと一緒に練習を始めようとする者もいた。

「おい、勘違いするなよ。いろいろあるだろうけど辛抱してやってくれ、などと俺が声をかけると思っているのか? 勝手に脱走したのはお前だろうが。何週間も休んでおいて黙って始めるとは何事だ。お前の方から何かあいさつがあつてしかるべきだろう」何のあいさつもなく始めようとした者には、励ましのことばどころか、のっけからそんなことばで始まった。ともあれこうして、一件落着。全員揃ってインターハイへ向けての練習が始まった。

さて、五年ぶりのインターハイ。場所は四国の松山だった。四国は私にとって因縁の場所だ。昭和五年のインターハイが行われたのが四国の徳島だった。その年の三月四日、私は四ヶ月の入院生活から解放され現場に復帰した。だから徳島のインターハイは、私の再起第一戦だったのである。場所は徳島と松山と違いはあるが、どちらも四国であることには変わりない。長い低迷のあとの晴れ舞台が、再起第一戦の地である四国で行われることに私は特別の感慨があった。

話を一〇年前に戻そう。

徳島のインターハイに臨む前、私は病院に出たり入ったりの繰り返しだった。三月に退院したものの、無理がたたったのか六月に入ってから再び血尿が出たのである。いろいろ薬を使ったがどうしても出血が止まらない。それで、七月に入ってからまた入院をし、尿管カテーテルで硝酸銀の注入を行った。どうにか出血が止まり、退院してすぐ、私は真っ青な顔をしたまま対馬から転校してきた原田五月を迎えた。

因縁話のついでに原田のことについて少し触れよう。転校した選手は、一家転住による場合は別として、転校後六ヶ月間は公式試合に出場できないというきまりになっているので原田をインターハイに出場させることはできないが、私は原田をチームの一員としてインターハイに連れて行った。それまで対馬の高校で奮闘していたわけだが、所詮対馬のチームでは県内で好成绩は残せたとしても全国大会など夢のまた夢である。

だから、原田にとっては初めて全国大会という舞台を経験したところが徳島だったわけだ。その後、ご存知のように原田五月は共同石油チームで成長し、日本を代表する選手にまでなったが、現役を引退したあとで国体のお手伝いのためにしばらくブレイを続けるようになったのが徳島なのである。これも因縁だ。

その、徳島インターハイでは、宿舎に着くと私はすぐにふとんを敷いてもらって横になった。硝酸銀注入以来出血は止まっているが、無理をするとまた再発しそうで、六月に出血してからずっと用心深くなっているのである。

二日目、開会式が終わって明日が一回戦という日、昨日と同じ様にふとんに横になっていると電話がかかってきた。中村監督からだった。

「今、加藤先生達と食事してるんだ。俺は体調が悪いおまえを呼ぶのを遠慮したんだけど加藤先生が是非山崎を呼べって言ってんだよ」

加藤先生というのは、あの、バスケットをやっている者なら知らない者はいない能代工業の加藤先生である。その先生が私を呼べというのだ。私はふたつ返事ですぐに着替えをして出かけた。タクシーで乗りつけてみると、料理屋の二階で五―六人の監督達が食事をしていた。

「ヤー、来た来た来た。さあさあ」

そうやって加藤先生自ら手を差しよべて私を招き入れてくれた。そして自分の隣りの席に私を座らせた。そうやって、加藤先生が強引に私を呼びつけたのには理由があった。

加藤先生は、実は私より数年前に腎臓で入院して、それこそ、医師からもう再び現場に復帰するのは無理だろうと言われたほどの大病をした経験がある。言ってみればバスケットのみならず、病気のことでも私の大先輩になるわけだ。しかも患った場所が腎臓ときている。加藤先生自身が、入院生活というものがどれほど辛いものか、健康であることがいかに有難いことが、再起できた喜びがどれほどのものか、ということを知っている。

加藤先生は一言私に、

「がんばれよ」

そう言いたかったのだ。加藤先生の話一度でいいから聞きたいと思っている人が大勢いる中で、私は逆に加藤先生から招待されることになった。人生というものは何が幸いするかわからないものだ。

さて翌日の試合は、思わぬ加藤先生からの招待に元気がでた私の気持ちとは裏腹に、実にみじめな負け方をした。相手は滋賀県の守山高校だった。スコアは忘れたが九〇対四〇ぐらいだったと思う。しかし、スコアよりも内容がダメだった。

「点数のことよりも、最後まで試合を見てやるつかという気がしない試合だったぞ」

負けた日の夜に宿舎へ来た中村監督が選手に言ったことばだ。まさにその通りだった。私自身、最後までベンチに座っているのが辛かった。

さて話を再び松山インターハイに戻そう。

因縁の四国での試合は、やはり徳島インターハイの時と同じく一回戦で大敗した。相手は千葉の昭和学院。スコアは九一対四一。しかし、選手がどんなにミスしてもどんなに点差が開いても、徳島インターハイの時とは全然違う充実感があった。ボール運びは一年生の松山と松尾である。それが、昭和学院のオールコートゾーンプレスに次々とひっかけられる。無理もない。まだ高校に入って四ヶ月だ。しかも、素質があるというだけで、中学時代にハイレベルの試合を経験しているわけでもない。私に教えられることも、こんなゾーンプレスに逢うことも、何もかもが初めての体験なのである

「ひとつひとつ覚えて来い。ひるむな。向かって行け。逃げさえしなければ必ずわかるよつになる」
そんな気持ちで選手の動きを追っていた。

徳島インターハイの時は、

「早く終われ。時間よ止まるな」

みじめな試合を目の前にして、そんな気持ちだった。それが、松山インターハイではどんなに大差がついていても時間が惜しかった。将来性充分の一年生に一分でも長く全国大会の厳しさを体験してもらいたかったのである。

ランニングスルー

平成二年の国体は北海道で行なわれた。北海道といえば、試合でなくて普通の旅行でさえ行ってみたい所である。加えて今年の下級生は将来性抜群だ。だからどうしても北海道国体には出場したかった。その国体に出場するには九州のブロック予選で二位以上にならなければならない。

その、九州国体の試合形式は、九州八県を三ブロックに分けて予選リーグを行い、それぞれの一位がまた決勝リーグを行うという形式である。予選リーグの振り分けは、Aブロックが二チーム、BブロックとCブロックがそれぞれ三チームずつで、それぞれのブロックにシードチームを配置する。

そのシードは六月の九州大会の成績を参考にするのだが、Aブロックには第一シードが入ることに決まっており、そこには九州大会一位の福岡が入る。Bブロックが第二シードで、そこには宮崎、Cブロックが第三シードで、そこには長崎が入る。と、そこまでは申し合せ事項で決まっていた。

そのシードであるが、実は九州大会のベスト四には福岡第一高校も入っていた。しかし、国体の場合は府県対抗だから、Aブロックに福岡はひとまとめにして入るのである。だから、九州大会でベスト四の一角を占めた長崎が自動的にCブロックのシードに入ったわけだ。これも、あの池田（第三章チヨ）

が純心戦の土壇場で踏ん張ってくれたからそうだったわけで、もしあそこ池田がスティールされて純心に負けていたら、おそらく九州国体はAブロックに入り、一回戦で福岡に大差で負けていたに違いない。運というのはそういうものだ。

私は第三章で、華奢な身体の骨がきしむほどがんばって土壇場をしのぎ、あとは素質充分の新生人に鶴鳴の未来を託した池田を『池田蟬』と形容したが、鶴鳴にとっては『池田菩薩』と形容した方が正しかったかもしれない。

インターハイから帰って来たのが八月四日。九州国体は十九・二〇の両日に北九州で行なわれることになっている。その間二週間しかない。その二週間でバスケットの入口をやつと覗いたばかりの連中に二位以内に入れる力を身につけさせなければならぬ。常識的には無理だ。しかし、どうせ負け元だ。何をやっても気楽である。

私にはある考えがあった。それはインターハイの期間中にヒントを得たものだ。インターハイの時、インターハイグッズが並んでいる売店を眺めながら歩いていると、店頭の本を積み重ねている売店があった。手に取って見てみると、『瀬戸際に立たされて』という題の、ボビー・ナイトの『シーズンを密着取材したドキュメンタリーの翻訳物だった。私はそれを買った。物語り風にしてあるから、技術的なことや戦術的なことを詳しくは書いてないが、その中に出てくるウオークスルーということばが私の頭の中でもややもやしてまとまらないでいたある考えに刺激を与えたのである。

ウオークスルーというのは、フォーメーションの動きの確認の練習のだが、ボビー・ナイトはそれにダミーデフェンスをつけてゆっくり歩きながら確認させるのである。

私は、大物新人達が部分的且つ瞬間的に起こったことに対しては元々持っている天性の素質で対応できるが、バスケットをより深く理解しなければ対応できない場面で敵に潰されてしまっているのがとても気になっていた。気になっているといっても、不安だったのではなく、積極的な意味である。これだけの素質があるのに彼女達が上級生になるまで待てない。何とかして、バスケットの何たるかを短期間に理解させる方法は無いものかと思案していた。そんな時、このウオークスルーということばにめぐり逢ったのである。

インターハイから帰るとさつそく、ランニングスルーと自分で名付けた練習を始めた。それは、ウオークスルーにヒントを得たもので、オフENSEのボール運び・崩し・破りの形の練習であった。デフェンスはやはりダミーである。ただ、私が重要視したのは、ボールがバックコートから運ばれてきて、フロントコートで相手の崩しに入るまでの課程であった。

私は、ハーフコートのフォーメーションやモーションの練習をいくらやっても、そこまで持ち込んでくる間に無駄や無理があつたら攻撃は成功しないと思っていた。バスケットボールの攻撃は、フロントコートにボールを持ち込んだ時にはもう九〇パーセントは成功するか失敗するかが決まっているのだということをこの頃特に感じるようになっていたのである。

即ち、速効の場合やオールコートデフェンスに対する攻撃の方法でなくても、ボールを得たガードがどのコースを通ってフロントコートにボールを進めるか、先行している選手がどのコースを走るか、後続の選手がどの場所を埋めて行くか、そんなことが、その攻撃が成功するか否かの九〇パーセントを占めているというわけである。

練習は次のような要領でやった。

スタメンチームとバックアップチームに分け、ゲームと同じようにラリーをやる。

双方ともディフェンスは構えから位置の移動等すべてのことを実戦と同じようにやるが、実際に相手のボールを奪うことはしない。

オフェンスの動きは、ゆっくりしたジョギング程度のスピードでやる。約束や注意は次のように決めた。

ボール以外の四人は、ボール保持者にボールを二秒以上待たせないように注意する。

フロントコートに入る時に進んで行くコースが、コートを縦に区切った五つのレーンをそれぞれがダブらないように入って行く。

常に、五人の距離を計りながら動く。遠すぎないように、近過ぎないように。

ボールを受けに行くタイミングは、ボールが自分の方を向いた瞬間とする。

そんな要領と約束でやるわけだが、要点があいまい（意図的にそうしたのであるが）なので選手達は最初は何が何だかわからない。特に、シュートに持ち込むタイミングがとても難しそうだった。ディフェンスがボールを奪いに来ないのだから、いつでもシュートに持ち込めるはずだが、それが難しいのである。それで、始めはボールを得た瞬間にガードに数をコールさせ、そしてフロントコートにボールを運び込ませるようにした。ガードがコールする数は四から八までの数字である。その数は、ボール得てからシュートに持ち込むまでのパスの回数を意味する。そうして数を数えながらやると、始めは空パスばかりいつまでも回っていたのが、シュートに持ち込む時はかなりディフェンスを崩して、これなら実戦でも有効なシュートになるだろうと思えるようなシュートに持ち込めるようになった。

インターハイから帰って二週間、毎日、午前三時間午後三時間、こればかりである。しかも、始めはパスがひとつ行なわれる毎に「ストップ」と言って私の声がかかり、そこでそれぞれの選手の位置の修正や動きを指示する。三時間の半分以上が説明に使われ、体力的な要素の訓練はゼロに等しい。

しかし、日を追う毎に止める回数も少なくなり、九州国体前にはもうガードが数をコールしなくてもフィーリングでシュートまで持ち込めるようになっていた。とはいっても、体力的には何の強化をしなのまま九州国体を迎えることには違いなかった。

鶴鳴のチームは下級生主体だから、九州国体ではこのチームオールコートディフェンスでいじめに来るだろうと予想し、オールコートマンツーマンプレスやオールコートゾーンプレスのボール運びのラニングスルーに多くの時間を割いた。しかし、相手が裏をかいてくることも予想されるのでさまざまな種類のディフェンススタイルになれておかなければならない。それで、オールコートのゾーンプレスは 番、ハーフコートのゾーンは 番、オールコートマンツーマンは 番、ハーフコートマンツーマンは 番と番号をつけ、あらゆるディフェンスに対応できるようにした。

その練習をやりながら、私はまた新たな考えを持つようになった。それは、この四種類のディフェンスに対する攻撃の練習は、次の試合の相手がゾーンでくるからゾーンの練習をするというのではなく、シーズンの始めに、まず何よりも先に、この四種類のディフェンスに対する攻撃方法を練習するべきだということ考えである。

シュートやパスや或いは部分的な攻防のドリルをいくら練習しても、実際の試合でボールが相手のコートまで滞りなく運ばなければ、練習したことのが絵に描いた餅になる。狙いとする大会がインターハイ予選なのだから、新人戦の段階ではマンツーマンの攻撃だけでできればよいなどとすましこんだこと言っているも、自分のチームだけで練習して強くなるというものではない。

チームが強くなるためには他流試合をたくさんやらなければならない。そんな時、練習していないゾーンプレスでこられたらどうする。まだそんな練習してないからいいんだと言っのか？それならその

練習試合そのものが、まったく時間の無駄使いになるではないか。

だから、最終の狙いとする試合までのすべての練習を有効にするために、まず何よりも、この四種類のディフェンスの攻め方を習得しなければならぬと私は考えたのである。

九州国体

九州国体の組み合わせが決まった。

A パート 福岡・熊本

B パート 宮崎・沖縄・大分

C パート 長崎・鹿児島・佐賀

である。

私はこれを見た時、「ヤッター!」と思った。そして、ランニングスルーの練習に一段と気合いが入った。「チヨが運を与えて以来、俺達にはツキがある。今度こそきつとうまくいくぞ」私は組み合わせ表を手にし、みんなを集めてそう言った。

九州の高校の実力順位をつけると、中村学園が一位で、次いで小林高校か福岡第一、そして九州学院、その次が鶴鳴と、だいたいそんなところである。だから、高校の総当たり戦をやるに鶴鳴は五番手あたりだろう。それが、国体になると県単位でまとまるから中村学園と福岡第一はひとつのパートに入る。それで、勝てない相手がひとつ消える。

小林高校はシードでBパートに入ることは決まっていたから、残りの九州女学院がどこに入るかが鶴鳴にとっては重要な問題だった。それが、理事長会の抽選で熊本はAパートと決まった。ということは、勝てないチームが三つともAパートにまとめられたということである。すると、二位になれば北海道国体に行けるのだから、福岡は始めから捨てて、小林高校中心の宮崎に的を絞って二位狙いに全力傾注できる。これは願ってもないチャンスであった。

しかし、組み合わせが決まったからといってやる事が変わったわけではない。相変わらずランニングスルー一本やりである。それ以外は一切やらない。シュートもディフェンスも何もかもだ。もちろんフットワークなど皆無である。約二週間の突貫工事だから、それ以外のことをやる暇なんかない。「体力の方は大丈夫だろうか?」などと心配している暇さえもない。そんなこんなで臨んだ九州国体だった。結果はどうなるか私にも見当がつかない。

予選リーグの一発目は鹿児島だった。鹿児島は串木野女子高校主体の選抜チームである。串木野女子は毎年練習試合をしてるし、監督の進藤先生とは兄弟のようにつきあっている仲だ。こんな時、こちらが年上だというのは有利である。試合の半分は私の口から出るセリフでごまかして勝たせてもらった。次の試合もそうだ。佐賀清和を主体とした佐賀選抜で、これも監督の貞松先生とは串木野の進藤先生と同じくらいにつきあわせてもらっている。そしてやっぱり私の方が年上だ。今度は、選手も一試合済ませた後でプレイに落ち着きが見られ、私の口と選手のプレイの両方で勝たせてもらった。

翌日が問題の決勝リーグである。一発目は福岡選抜である。もちろん勝とうなどと思ってもいない。これは一応スタメンで臨んだが適当なところでバックアップの選手と交代させ、次の試合に疲労を残さないようにしてただ試合を消化しただけだった。

福岡との試合の後しばらく休憩してよいよ宮崎との試合である。宮崎はやはり、オールコートのマッソーマンディフェンスで最初から潰しにかかってきた。それに対して鶴鳴は、最初、ランニングスルー

ーで練習したとおりの動きでボール運びをやっていた。しかし、しばらく様子を見ていた私はそれをやめさせた。ランニングスルーで練習した動きというのは、ギブアンドゴーやフラッシュなどの動きを織り交ぜた全員の動きを主体としたものだった。私はそれをやめさせ、徹底的に二対一で攻撃する方針に変えたのである。

まず、ガードがボールを持ったら他の四人はコートいっぱい広がる。ガードは自分の相手と二対一で勝負し、ドリブルで抜く。すると、途中で他のディフェンスがヘルプに来る。途端にパスを出す。パスを受けた選手は、自分のディフェンスがヘルプに出かけたので楽にボールを持てる。しかし、すぐには攻めない。ディフェンスが再びプレッシャーをかけに来るのを待ってまた抜く。その繰り返しである。

なぜ私はそのような方針に変えたのかというと、宮崎のディフェンスは組織的な動きでボールをもらおうとすると、それに対してのプレッシャーは非常に厳しい。要するに、前へ出ようとする力はとても強いのである。前へ強いということは、逆に後には弱いということでもある。だから私は、宮崎のようなディフェンスを攻めるには、ボールをうまく運ぶことよりも、目の前のディフェンスを縦に切っていくとすることを優先させる方が良く考えたのである。

そして、選手が若くても、素質があるだけにそのように限定された場面では力を発揮できる。選手にとつてやつかない、連続した場面でのプレイの読み切りを気にしなくてよいのならその方がよい。私は一試合中「スペース！ スペース！」と、どなり続けていた。

宮崎は、長崎が思うようにうろたえてくれないのでいららする。だから、前半は常に長崎がリードして進行し、前半七点差で終了した。

後半は宮崎がディフェンスを変えてきた。始めはスリーターのゾーンだった。これはランニングスルーで練習していたから選手もうるたえなかった。それがだめで今度はノーマルのマンツーマンに変えてきた。これも何とか攻めた。だから、前半の貯金がなかなか減らない。埒があかないので、終わり頃になって再びオールコートのマンツーマンプレスで来た。今度はいくつかひっかかった。無理もない。私も勝てるかも知れないと思つて勝負と残り時間を気にするし、選手も勝負を意識しながらやっている。だから、大事を取りすぎて相手の乱暴をついつい許してしまう試合になってきたのである。

始めの頃は、相手の乱暴をその場でやつつけようとしていた。だからうまくいっていた。私がいくらか声を枯らして「自分の前を攻めろ！」とどなつても、勝負を意識している選手は理屈でわかつていなくてもなかなかプレイで表現はできない。オープンスペースが見えるからパスする。それを捨て身のダッシュでインターセプトされる。そんなプレイが二―三本出てバタバタバタと追いつかれたが、ゴングに救われ、辛うじて二点の貯金を残して勝ちを拾った。

大望の北海道国体の出場権獲得である。この出場権獲得は、今後の鶴鳴のバスケットにとって計り知れない程重要なものだった。

ナウ

九州国体が終わってあちこちと練習試合をした。今度は動きの型を覚えるのではなく、実戦の中でそれを選手に体験させたかったからである。相手は、実業団や大学が主体だった。あらかじめランニングスルーで目だけは養っているの、試合を重ねながら選手達は日に日にうまくなつていった。しかし、神様は本当にどこまでいじわるをすれば気が済むのか、よりによつてこれからチームが上り調子になるうとする時に事件を起こしてくれた。

八月二七日。松山が腰をやった。私はその瞬間を見ていた。そして、スーッと血の気が退いていくの

が自分でもわかった。その日は地元の三菱重工と試合をしていた。松山はインターセプトしたボールをドリブルシュートに持ち込んだ。後から誰も追いかけてこないノーマークシュートだった。そのシュートがポロツと落ちた。松山はちょっとリリースが気になったのだろう、着地しながら目はボールをひどく気にしていた。そして、着地しながら「しまった！」という顔をし、次の瞬間「痛い！」という顔をした。ボールが気になって、シュートをした後の空中のバランスと着地の姿勢に一瞬集中力を欠いたのである。

私は、松山が腰を捻ったのがすぐわかった。「ピッ！」私は短くホイッスルを吹き、「ナウ、アウトだ」そう言って山崎と交代させ、何事も無かったような素振りです試合を続行させた。しかし、頭の中はもう試合を追っかけてはいなかった。私の全神経は、ベンチに退がった松山の様子に注がれ、また、頭の中では松山が腰を捻った場面が何度も何度もプレイされていた。状況を思い浮かべることによって松山のケガの程度の予測を立てるのである。

私が立てた予測は単なる腰部捻挫であろうということだった。しかしそれでも、完全休養に一ヶ月半はかかる。それからリハビリをやって元どおり復帰するのがそれから一ヶ月後だろう。プレイを覚えてからの二ヶ月半は痛くないが、これからプレイを覚えていこうとする時の二ヶ月半は痛い。念のため、翌日病院に連れて行った。かかりつけの整形外科医である。結果は私の立てた予測通りであった。

私は、選手がケガをしてしまった場合、休養とリハビリには時間をかける。サポーターや器具をつけた痛々しい姿でコートに立たれるのが嫌いなこともあるが、何よりもこわいのが、再発と慢性化である。だから私は、痛みが残っている場合は絶対にみんなと一緒に練習させない。松山は特に、将来日本を背負って立つ選手になるはずだから、ケガや病気のことを将来に不安を残すような選手にはしたくなかった。

松山はそれから約一ヶ月休養した。だから、九月中旬に行なわれた北海道国体はみんなと一緒にいくことができたけれどもベンチに座って見るだけだった。北海道から帰ってから彼女はぼちぼちリハビリを始めた。彼女がみんなと一緒に練習試合に出たのは一〇月一日、韓国から日本に遠征に来た仁聖女子高校との試合だった。本当はまだリハビリの途中だったので無理だった。

しかし、松山の将来のことを思うと、韓国ナンバーワンのチームの強さや速さを少しでも肌で感じさせたかった。だから、出したのはほんの数分である。しかも、ちょっと出してはすぐ引っ込めるといふ具合に慎重にやった。

一瞬ドキッとする場合があった。それは松山がリバウンドボールの奪い合いに参加した時だった。相手の一八センチのセンターに弾き飛ばされ松山は尻もちをついた。

「大丈夫か？」

私の声に照れ笑いしながら立ち上がる彼女の顔に、痛みの表情は無かったのでホッとした。しかし私ももう松山をコートには出さなかった。

それから一〇日後、一〇月二日に全国選抜大会九州予選が行なわれた。松山の腰は、普通の動きでは痛みを訴えなくなっていた。しかし、まだリハビリ期間中の彼女に活躍を期待するのは無理だった。その試合は熊本の九州女学院に負けた。こうして松山は、バスケットがわかりかけてきてから結局公式戦には出場しないか、出場したとしても体調不十分のままで一年目が終わった。

二年目、松山はまた腰を痛めた。

八月十五日。インターハイから帰ってきてきて第一次の強化練習が終わり、明日から帰省という日だった。今度は、スクリメージをやっている時だった。ディフェンスをしていてドライブで抜かれそうになったの

で、スライディングステップからクロスステップに切り変えた瞬間だった。私はその場を見ていなかったが松山がそう報告した。

「また腰を捻りました」

「ナニ！ どうやってて？」

松山は前述のとおり状況を説明した後、

「でも、今回は前の時より軽いみたいだから三週間ぐらいで大丈夫だと思います」

と、付け加えた。「え？ 選手の分際で自分の休養期間を自分で決めるのか？ 監督の指示も受けないで？」と、驚かれる読者がいるかも知れないが、それは私の教育方針である。プレイにしろトレーニングのことにしろケガのことにしろ、何でも監督まかせではなく経験したことを元にして理論を理解し、予測を立ててみるのは大切なことだ。特に、ケガに対して私は厳しかった。

「ケガをしないように注意しろ」

「しかし、ケガしてしまったら隠すな」

「痛みは堪えるな」

「痛いのには練習するな」

常々選手にはそう言っている。

というわけで、松山の申告どおり三週間の休養が必要ならば八月下旬の九州国体には出場できない。私は泣きたい気持ちになった。またひとつ、九州レベル以上の公式戦を松山はベンチから見ることになるのだ。松山もそれは悔しいだろうし、私がかかりするだろうということは充分わかる選手である。しかし、だからと言って、私を安心させるために休養期間を短く言ったり、ケガの程度を過小申告したりはしない。松山はやはり、延岡で行なわれた九州国体の時はベンチだった。そんなわけで、一〇月に福岡で行なわれた国体ではプレイに切れがなかった。

松山はさらに、翌平成三年一〇月二八日、腰痛を訴えた。その日は月曜日で、月曜日は体育館でバレー部が練習する日なのでバスケット部はグラウンドで走ることになっている。その日は諫早の陸上競技場まで出かけ、駅伝の練習を兼ねて競技場の周囲を走った。松山はその日から腰痛を感じた。しかし、前二回の時の経験から、しばらくすると治りそうな気もしたので翌日から普通に練習した(本人談)。そして金曜日になって、

「先生、腰が痛いので駅伝のメンバーからははずしてください。そして、しばらく休ませてください」と、私に申告した。松山はそれから約一ヶ月間練習を休んだ。思ったより回復が遅い。本人も焦った。私もちろん焦った。暮れの選抜大会にはどうしても勝ちたい。しかし、おそらく日の丸をつけてプレイする選手になるだろうと思われる松山を傷物にして高校を卒業させたくはない。その両方の思いで板挟みになって苦しかった。松山は結局、選抜大会には出場したが、チーム練習に復帰したのが十二月一〇日。突貫工事での出場だった。

こうして松山は一年に一回腰を痛め、そのために大切な公式戦を休んだのが二回、体調不十分のまま出場したのが二回、計四回棒に振った。しかし、その度に充分の休養と念入りなりハビリを経て復帰させるので慢性化はしなかった。「鶴鳴の選手はサポーターやテーピングしてるのがいませぬ」と、多くの人から言われる。

確かに、昔に比べてケガ人は少なくなった。だが、ケガ人がゼロというのではない。第二章の田端のように、ケガばかりして思いどおり活躍できなかった選手や、松山のような選手もいる。ただ、ケガを

しているのに無理して練習させたり無理して試合に出したりしないだけだ。治るまで待つ。それは私にとっても選手にとっても辛いことである。しかし、後々のことを考えるとそれは辛抱しなければならぬのである。

事件いろいろ

私のやり方は、第一章「上下関係」で述べたように、つまらないことで上級生をいばらせない。鶴鳴に入ってきた選手達はみな、上級生が親切なこととお金がかからないことがいいと口をそろえて言う。しかし、ゴタゴタがまったくないわけではない。やはり、主義主張の違う人間がおおぜい集まればいろんなことが起こるものである。

2学期が始まって間もなく、ある選手の担任から相談があるとされた。

「本人は絶対山崎先生には言わないでくれと言っていますがね。Mさんの成績の下がり方がひどかったので呼んで聞いてみたんです。ところが最初なかなか理由を言わないんですよ。私が問い詰めていくと白状したんですが、どうも寮の生活のことで悩んでいるようです。一緒に部屋に住んでるH選手が音楽がとても好きなんですってね。それで、H選手はいつもボリウムをいっぱい上げてラジカセを聞いているそうなんです。だから、試験勉強の時くらいヘッドフォンで聞いてくれと言っけれども、ヘッドフォンでは音がよくないとか、私は音楽を聞きながら勉強しなければ頭に入らないと言っ、なかなか言っことを聞き入れてくれないそうです。そんなわけで、試験勉強ができなかったことよりも、これから卒業するまでの長い間こうして一緒に寮生活するのにこれではたまらんとか、だからと言って仲たがいをしたのでは部活動がぎくしゃくしてくるしとか、何か丸く収める方法はないかとか、いろいろ考えてたって言うんですよ。それで、本人がもっとも気にしていることが、山崎先生には絶対に言わないでくれということですから、そのところをうまく酌んで指導してくれませんか」

私はその日のうちにこの問題を処理した。まず、練習の最初にみんなを集めた。そして、鈴木先生から聞いたことをありのまま話し、それが事実かどうかHに確かめた。Hはその事実を認めた。そこで私は言った。

「このようなことが他にもあるはずだ。みんなこのことを自分の問題として省みてみればいい。自分は思いを遂げていい気持ちでいても、そのために他人がまゆをひそめていることがあるかもしれない。人が集まって何かをやるうとする時、一番大切なのは気配りだ。自分の言動が他人を不快にさせていないか。喜んでもらえているか。そうやって気を配っていれば何事もうまくいく。H！、今回のことで一番大切なことは、そうやっておまえが他人に不快な思いをさせたことではなく、Mが鈴木先生からどんなに追及されてもなかなか口を割らなかつたことだ。それがなぜだかわかるか？」

Hはこっくりしてうなずいた。しかし、私はHには答えさせずにことばを続けた。

「Mは告げ口をしたくなかつたんだ！自分が我慢して丸く収まればそれに越したことはないと思っただ！ということとは、自分がそれを口にした後の影響をいろいろ考えて気を使っただ！俺はおまえがとんでもないやつだと叱るためにこうして話をしているのではない。Mが鈴木先生に問い詰められてこの事実を話すことがどれほど勇気のいることだったか、それをわかつてやってほしいから話しているのだ。おそらくMは、これを言ってしまったら、寮での生活がしづらくなるかもしれないとか、後々の部活動が面白くなりはいないかとか、いろいろ考えただろう。こうして今話している間にもMは今後のことを心配しているはずだ。俺が今考えているのは、Mがこうして口を割ってしまったけれども、もう何

も心配しないで部活動に打ち込めるようにしてやらなければならないということだ」
ふたりともボロボロ泣きながら話を聞いていた。
そうしてこの一件は落着いた。

それからひと月して、3人いた1年生のマネージャーのうちのひとりであるTがやめた。理由は部内の人間関係のもつれだった。本人の言い分を聞くと、私がマネージャーに指示したことが自分にだけ伝わらないことがあるとか、練習が終わって帰る時に校門のところでもみんな待っているのに近頃誰も待っていてくれなくてひとりで帰ることがあるとか、要するに自分が村八分にされていると言いたいのであった。

私は、「うん、わかった」と言っただけで本人がそういう理由でやめたいと申し出て来たことを受理した。それから数日して、夜、私の自宅にTから電話がかかってきた。

「私、いろいろ考えたんですけどやっぱりやめます。それから、うわさで聞いたんですけど、私がいろいろ工作しているとか……」

「俺は、この前おまえがやめたいと申し出た時、考え直せとかやめるなと言った覚えはない。それなのに、いろいろ考えたんですけどやっぱりとか、おまえが言っていることばの意味が俺にはわからん。そして、どんなうわさが立っているか知らんが、俺はうわさで物事を判断することはない。俺は自分の目で確かめたことしか信用しない。くだらんことを言つな！」
そう言っただけで私はガチャンと電話を切った。

私はTが村八分にされていると申し出てきた時にいろいろ調べた。他のメンバー達はみな指摘された事実を否定し、逆に彼女の行為に憤慨していた。例えば、彼女が校門のところに行ったらみんな帰ってしまったって誰もいなかったというの、みんなが待っていたら何を怒っているのかわからないが彼女がブンブンしてひとりでさっさと帰ってしまった、というのが事実だという。

こうなると、どちらの言い分が事実なのかわからない。そして、どちらが事実かを追及することはさして重要なことではなくなってきた。それよりも、こんなレベルの低い問題でいざこざが起こったことに対して私は腹が立って腹が立ってしかたがなかった。

ずっと根源を探っていけば、一年生にマネージャーが三人いたことが原因だった。その時のマネージャーは、チーフが二年生の眞鳥で、その下に三人のマネージャー候補がいた。まだ見習いの段階である。その中でTは知人から頼まれて預ったマネージャーでもあったし眞鳥のアシスタントに育てようとしていたので、他のふたりよりも優遇されていた。そこに確執が生じたのである。

そんなことが起こると相前後して、Tの素行のことで私の耳に入った情報がふたつあった。ひとつは、お祭りの夜に定められた帰宅時間よりも遅い時間にTが繁華街で遊んでいたと、他の先生に報告を受けたことだった。もうひとつは、教科書の置き残しは禁止されていたにもかかわらず更衣室のロッカーにTが教科書を置き残しているという報告だった。

私は、その報告を受けていたのでTが「やめます」と申し出た時「わかった」と言っただけで引き止めなかった。それがなかったらもう少し事情を聞いてやっただかも知れない。

こんな事件があると、一人ひとりの本当の人間性が見事に表に出てくるものだ。去るものも残るものも、自分可愛さにいろいろ言う。私は、どちらの言い分も「くだらん！」の一言で片付けて以後一切触れなかった。やっかいなのは親だ。おとなの方が頭が固く融通がきかない。それには手紙で通告した。ことばでやりとりしていたら、つまらないことばじりをとらえてグジグジ言っただけで本筋から離れてしまっただけからだ。

「どちらの言い分が正しいとは言わない。しかし、どちらもレベルが低い。これ以上もめが続くのならみんなやめろ。マネージャーの仕事は俺ひとりやった方が気楽だ」

遠山の金さんの桜吹雪ではないけれど、そんな啖呵を切っておしまいにした。それ以後、何事もない。

表向きは平穩でも目に見えないところではこつしたことがある。どんなにしつけをしても人間がおおぜい集まれば全員が気持ちが悪くピツタリ合うとは限らない。この際、過去の幾つかの事例を紹介しよう。昨年のものであった。練習が終わって片付けをしている時、三年生のある選手が

「一年生ーい、このゼッケン洗濯してきておいてねえー」

と、あちこちに散らばって仕事をしている一年生に向かってそう言った。

「ちょっと待て！洗濯はなぜ一年生なんだ？誰がそんなこと決めた？え？」

そうやって私はH選手のセリフを咎めた。するとH選手は

「K先輩からそう言われていました」

と答えた。

Kは一昨年卒業した選手である。私がそんなことで上級生と下級生の階級をつけることをもつとも嫌うと知っているくせに、私の目が届かないところでKはそんなことをしていたのだ。Kは、知人から頼まれて預かった選手であったが、下宿先で問題を起こして追い出されるなど、問題行動が絶えない選手であった。

「おまえ自身は、そのことが良くないことだとはわかるのか？」

「ハイ」

「そんなことは俺がもつとも嫌っていることだと知っているはずだ。悪いとわかっているのなら、先輩がそう言っていたなんて責任をなすりつけたりしないで自分の代になったらそれをやめればよろう」
こんなことが、私の目の届かないところではちょこちょこ行なわれているのである。それは監督の方針にそぐわないものだとか監督に知れたらまずいのにとわかっている、それが非常に深刻なことになりそうだとか、よほど目に余るようにならないと私の耳には入ってこない。なぜなら、Mがそうしたように、できるだけ丸く治めたいと思って私に申告しないからである。

まだまだいろいろあるが、どんなにしつかりしつけをしても絶対に優等生集団はできないということ。指導者は知っておかなければならない。

事件話ついでにもう少し話そう。

ずっと以前、Y選手の家が保証倒れか何かで抵当に設定され、その保証人になっている相手の借金を払わなければ家を取り上げられるという事件が起きた。まだ若かった私にお金はない。私は知人や親戚に事情を言ってお金を借りまくり、その穴埋め資金を作った。それで、その家は他人に渡らず、商売も続けられて借金も返すことができた。私の指導者生活でもつとも大きな事件だった。

選手の悩みや進路に関することは当然だが、年月が経てば経つほど「こんなことまで私に話しているのだろうか？」と思うようなことまでも相談が舞い込むようになった。それでも、「相談されるといいことはそれだけ頼られているということだから」と思ってすべて相談に乗った。

これは事件ではないが、私がケガや病気のことについて勉強しているという情報が広まっていくにつれ、その方面の相談事が毎年増えていった。それが、はじめは自分の学校の他の部活動の選手が相談しに来るぐらいだったのに、他校のバスケットの選手からも相談を受け、他校のバスケット以外の選手にエスカレートし、果ては知人や友達を通じてまったくバスケットとは関係のない人からの相談まで舞い

込むようになった。しかし、そのすべてを私は引き受けた。なぜなら、そうして世話をしやる自分が自分にとって生きた勉強になるからである。

噂いろいろ

鶴鳴に指導を受けに来たり練習試合に来た指導者や中学生や高校生は、家族や友達から一〇人のうち八人は「鶴鳴どうだった?」と聞かれる。聞く方も伝える方も、観点がさまざまだろうから、「鶴鳴どうだった?」のあとに続く会話はこれまたいろいろあるだろうが、例えば「鶴鳴の体育館はカーテンを全部閉めてるから暗いんだよ」と、ある選手が友達に話したとしよう。

鶴鳴の体育館の使用方法は曜日で違うが、玄関側でバスケット、奥のコートで新体操とバドミントンが練習する曜日がある。バドミントン部が練習する時は、窓から入る光がまぶしいのと風でシャトルの方向が変わらないようにするためにすべての窓とカーテンを閉めて練習をする。

「暗いんだよ」と友達に話した選手は、バドミントン部のために全部閉めて練習しているのだとわかって話す。しかし、その話とその友達から次の友達へ、さらに次の友達へと伝わって行く時、いつの間にか『バドミントン部』は消えて無くなり、そのかわりに『バスケットの秘密練習のために』というセリフがくっついていく。噂とはそんなものだ。

昭和五三年に選抜大会で準優勝した時、テレビ局が取材に来た。放課後の練習風景をカメラに収めて帰り、それを数日後の朝七時十五分から三〇分までの十五分間特別番組として放映した。その年の秋、県内のある中学校に選手募集に行った時のことである。「鶴鳴はあんなに朝早くから練習してるんですか?放課後も練習するんですよ?いったい一日に何時間練習するんですか?」と質問された。

私は最初、その先生が鶴鳴の朝練のシューティングを見学にでも来たことがあるのかなあと思っていたがどうも話の様子が違う。なんのことはない、その先生はテレビを見ていてそれが実況放送だと思っていたのである。どんなバスケットボールの名門校でも、朝の七時半頃にフットワークや速効や試合形式の練習をやるわけがない。しかし、スポーツにはほとんど関心のない人は、そんなことが可能だと思ってしまうのである。

その先生は、そんな鶴鳴に自分の学級の生徒を推薦してはたしていいのだろうかと真剣に心配したのである。

こんな類の話はまだある。

「君は授業は受け持ってるの?」

これは、後に中学校の校長にまでなった先生からまじめな顔で聞かれたことである。

「選手はみんなと同じ時間割どおり授業を受けてるの?」

こんな質問も受けたことがある。

こんな質問を受けると、世間の常識そのものに疑問を抱きたくなるが、その分野に精通していない人のというのは、特殊な分野では自分たちの常識では計り知れないことが行われていると思ひ込んでしまっただろう。

数年前の五月下旬に県外の某高校から練習試合を申し込まれたことがある。確か水曜日か木曜日の平日だった。その時、「放課後に出発して間に合いますか?」と私は聞いた。答えは「いえ、うちは大会前になると午後の授業は免除で出かけられるんですよ」だった。その時「へえー、そんな学校もあるのか」と、私は驚いた。そんな特例があるので、その分野に精通していない人にとっては、私でさえ「へえー、そんな学校もあるの?」と驚くような特例がスポーツ名門校では当たり前前なんだと思ってしまう

のかもしれない。我々にとっては、とんでもない誤解を受けてしまうので、そんな特例は迷惑な話だ。

腎臓の病気で入院した時は「山崎はガンで、もう命が危ない」と全国に噂が流れた。中学の監督時代も鶴鳴に移ってから「山崎は 高校に移るんだって」とか「鶴鳴やめて実業団の に行くんだってよ」という噂が流れたけれども、この種の噂は数えあげればきりが無い。もちろんどちらも事実無根である。「誰がそんなこと言ったんだ。デマだよ」と一笑に付すわけにはいかない。そんなことをまとも信じる人達がいて、それが選手リクルートに大いに影響してくる。だから噂対策には神経を尖らせておかなければならないのである。

噂対策で一番気をつけなければならないのがグチである。熱心に仕事をしていれば必ずその障害になるようなことが誰にでも起こる。すると不満が溜まりそれがグチとなって口にでる。そのグチが身内の中で治まっていればいいのだが外でグチをこぼすようになるともういけない。

「うちの選手は頭が悪くて…」

「うちの学校の体制ではがんばっても認めてもらえないから…」

このようなグチは、指導者が自分の苦労ぶりを他にわかってもらいたいための言い分以外の何物でも無い。そういつてグチをこぼし「あんたも大変だね」などと慰めてもらって溜飲を下げている間に、それが「あそこの学校は幹部がだめなんだって」「あそこの学校は成績の悪いのしか行かないらしいよ」という噂になって広まっている。結局、酒飲んだ勢いかなにかでつまらないグチをこぼしたがために、自分の首をしめるような噂の種をばら撒いてしまうのである。

グチばかりではない。町を歩いていても、プライベートの旅行にしても、いつ誰がどこで見ているかも知れないのだから、誤解されたり噂の種になるような言動は一切しないことである。強いチームを作るには練習を熱心に行っていればいいというわけにはいかない。噂対策にはかなり神経を使わなければならないのである。

はまなす国体

北海道は寒いので、国体は例年より一ヶ月早く九月に開催された。

少年女子の会場は恵庭市だった。

恵庭市は札幌市と千歳市の間に位置する小さな都市である。都会の喧騒や人が多いところが嫌いな私にとってはなかなかいいところである。千歳空港からバスで恵庭に向かう途中、まず私を感激させたのが赤トンボの群だった。私は秋になるとわざわざ赤トンボを捜しに出かけるくらい赤トンボが好きである。長崎では二ヶ所、赤トンボが毎年たくさん集まる場所がある。そこへ出かけて行って赤トンボを見ると、「ああ、今年も大丈夫だ」と、安心して帰ってくるのである。

赤トンボがいなくなると自分の少年時代まで消えて無くなってしまふような気がする。赤トンボが飛んでいる間は地球もまだ大丈夫だ、というような信仰心と言ってもいいほどの気持ちを私は赤トンボに對して持っている。

その赤トンボがバスの車窓から見える。手をのばせば捕まえられそうなくところを飛んでいるのである。「あ、赤トンボだ」私ひとりだけがしゃいでいて、選手達には何がそんなにすばらしいのかわかりはしない。みんなきょとんとして私の顔をみていた。

国体がこのような小さな都市で行なわれる時はたいい民泊と決まっている。私達は五軒の一般家庭に分宿することになった。民泊になると受け入れる方でも気を使う。例によって、まず公民館に案内されひととりの挨拶がある。そして歓迎行事だ。公民館のテーブルには蒸かしたじゃがいもとうもろ

こしが山と積まれた。

「さあ、食べてください」

「……………」

何も言わないが、みんなの目には

「え？ これ、全部たべるの？」

と書いてある。

それに、北海道という所は土地の人よりも本土から渡って来た人達の方が多い土地もあり、県人会などというのが多く、いろんな所からご祝儀や差し入れをもらった。

そうして大変な歓迎ぶりとは雄大な景色の中で試合が行なわれたわけだが、一回戦の相手は名短だった。もちろん勝つ気は最初からない。全国のトップレベルの力を肌で感じ取ってもらえばそれでよかった。スタメンは浜口（姉）、芦北（純心の三年生）、二年生が岩永ひとり、一年が浜口（妹）と松尾である。結局筋力のない選手はダメ。自分の仕事のできたのはリードマンの松尾と控えて出てきた二年生の山崎だけだった。他の選手は相手のプレッシャーにあおられて何もできない。

スコアは九二対四一。大差の敗退だが、そんな中で松尾が成長したのは何よりの収穫だった。残念なのは、来年の主力である松山と田端をケガのためにベンチから一步も出せずに終わったことだった。

伸び悩み

平成元年一〇月二三日付 全国選抜大会九州予選結果報告（二回戦 九州女学院六七対五八鶴鳴）
悔いが残った試合でした。

理由は、作戦を実行する上で、そして選手を起用する上で、私自身の思い切りが悪かったからです。九州国体以後、田端と松山のケガの回復と見合せながらの練習で用心し過ぎました。終盤の戦いぶりを振り返れば、結局プレスディフェンスもできたんですが、練習不足が気になり無難な方策ばかりをとったのです。点差が常に射程距離だったことも、手を打つことに二の足を踏ませました。選手とコーチの信頼関係は、十分に練習を積み上げてコートの上で創り上げるもので、ノートや作戦板の上で創られるものではありませんね。

平成元年一〇月三〇日付 長崎地区新人大会結果報告（決勝 鶴鳴六九対三九純心）

一〇月十二日 韓国チャンピオンの仁聖高校と親善試合。田端・松山をほんの少しずつ出しながら、三〇点の差をつけられたけど善戦。その後、両人の身体づくりに気を配りながら戦列に復帰させる。

一〇月二二日 全国選抜九州予選。動きが重く、本来の力を出し切れず。

一〇月二八日 地区新人戦優勝するも、九州国体時の力は影も形もなし。

以上のような経過をたどり、チームは今どんど底です。

私の目から見てもっとも強く感じられるのは、選手がプレイの選択に迷っていることです。それを挽回しようとするほどそれが裏目に出てすると深みにはまって行くようです。選手が迷っている時こそ私の出番です。がんばります。

以上、全国選抜九州予選の報告と長崎地区新人戦の報告を原文のまま掲載したが、『選手が迷ってい

る時こそ私の出番』というのはたてまえの発言であって、本音は選手を殺したいほど腹が立っていた。とにかく公式戦になると真つ青な顔で試合をするのである。それが、日頃家庭ではわがままばかり言っている選手に限ってそつだというのが一層腹立たしかった。

「相手がおとなしいと強そうな態度をとるくせに、いざとなったら腰をぬかしやがる。弱虫どもが！」
このところずつとそう思っていたところへもってきて地区新人戦のふがいなさである。

「今から帰って練習だ！」

地区新人戦の決勝戦終了後、マネージャーにそう言って私はさつさと会場を後にした。試合の後、学校に戻って練習をするなどもう過去の思い出話の中のできごとに過ぎなかったのに、私はもう正気ではなかった。『練習』と口では言ったものの、心の中では復讐心が燃えたぎっていた。私の熱意と辛抱を踏みにじった選手を私は許せなかった。

練習が始まって三〇分も過ぎた頃、

「きさま、コノヤロウ！ふがいないにもほどがあるぞ！」

バシーツ、バシーツ、バシーツ、バシーツ。

松山の鼻から鼻血が出る。続いて浜口だ。

「なんだあ、そのツラはあ！」

浜口の脅えた顔が私を一層狂気に走らせる。

バチーン、バチーン。

浜口はドターツと床に倒れて泣きじゃくり、起き上がろうともしない。それがまた、試合中の彼女のおどおどしたプレイぶりどダブって私の狂気に一層拍車をかけた。

その夜、私はなかなか寝つけなかった。うとうとととしたと思っただけで目覚めた。自己嫌悪にさいなまれてもがき苦しんだ。鼻血を流した松山の顔が、倒れて起き上がってこない浜口が、何度も甦ってきた。何年ぶりだろう。本気で選手を殴ったのは。

「バカな、バカバカバカ。あー、くそっ」

私はよく、無意識でぶつぶつ独り言を言うそうである。その夜は自分でも意識下で意味不明のことばを口走っていた。殴った選手に申し訳ないとか自戒の念とか、そんななまやさしいものではない。理性を失い、練習を報復手段としてしまった自分が嫌でたまらなかった。それこそ死んでしまいたいくらいの自己嫌悪に襲われた。

私は、練習試合や合宿などでいっしょになった他校の指導者が、選手をバチバチ殴ったり身勝手な説教をしているのを見ると気分が悪くなる。もちろん私自身も昔はそのような指導者と同類の身勝手な指導者だった。しかしそれはもうずいぶん前に卒業した。

「俺も昔はずいぶん無茶をやったけど、そんなやり方からは何も生れてこないよ」
若い指導者達にこんなセリフを言い始めてからもう何年経つのか。それなのに自らの手でその卒業証書を破り捨ててしまったのである。

こうして、平成元年一〇月二九日は私にとって忘れられない日になった。

一〇月の地区新人戦の後、浜口のポジションを少し変えた。それまではローポストの位置で主にプレイさせていたのをミドルポストに変えたのである。浜口にパスを入れようとするとディフェンスは前に回ってそれを阻止しようとする。するとそのディフェンスの頭越しにパスを通すことになる。その時、浜口の背中空間が狭過ぎると、背後からヘルプに来たディフェンスに潰されるのである。まだ、咄嗟

に起こったプレイに浜口は対応できなかった。

それ以前に、オフENSEの組み立ても浜口と他の四人の動きは別々にしていた。浜口の負担を軽くするために浜口以外の四人はモーションオフENSEをやり、浜口は周囲の状況を見てフラッシュやシールやピックやスクリーンをやるように組み立てていたのである。

いろいろやり方を変えてみた結果、十一月の第二週に入った日曜日、三菱重工・県立短大・鶴鳴の合同練習でバツと灯りがさした。それまで両チームにまったく歯が立たなかったのが、この日負けている試合を挽回して引き分けに持ち込んだのである。追い込めたのは浜口が得点できたからだだった。エントリーポジションをミドルポストにして、浜口の動ける範囲を広くしたのがその理由のひとつである。

十一月中旬に県下新人戦が行なわれた。その結果報告に私は次のように書いている。

平成元年十一月二日付 県下高校新人大会結果報告（決勝 鶴鳴六八対三八純心）

前回の地区新人戦とほぼ同じ点差ですが内容はまるで違います。走れるようになりました。課題として残っていた松山のシュートの信頼度が高くなりました。これからの課題として上げるならば、

チームとしては……各ハーフの途中に必ず一度は訪れるもたつきの時間帯をなくすこと。それは、体力と集中力の問題だと思えます。

個人的には……ほんのちよつとしたことでもいつまでも動揺が尾を引く岩永・山崎・浜口の精神の鍛錬をしなければなりません。

結果報告にそう書いて、

「さあ、これでトンネル脱出だ」

私はそう思い、目の前にかかっていた霧がパッと晴れたような気持ちになった。しかし、それも長くは続かなかった。先月のようなどん底状態にはならないけれど、すこし良くなったと思えばまた悪くなり、また少し良くなったと思えば悪くなるというふうにして、上向きになった力がそのまま順調に伸びるといえることがないまま時が過ぎて行った。

年が明けて一月、九州春季大会の県下二次予選が行なわれた。

平成二年一月二二日付 九州高校春季大会県下二次予選大会結果報告（決勝 鶴鳴八六対五六純心）

試合前日の十九日は健康な状態で練習に参加しているのが四人（岡田・岩永・松尾・浜口）でした。田端のふくらはぎ肉離れ以外はインフルエンザで、練習を休むだけでなく全員高熱が出て学校を欠席という状態でした。

三学期に入ると学校全体がインフルエンザに襲われ、始業式から日を追う毎に患者がウナギ昇り。始業式の日には欠席総数三七人だったのが連休明けの十六日には二八三人。バスケット部員も十四日の午後、藤原が急に発熱して帰宅したのを皮切りに毎日患者発生。

大会初日の二〇日は山崎が自宅療養のため欠場。翌二一日は山崎は出てきたけど川原が発熱して欠場。結局この大会は一〇人で戦いました。『ケガ病気も実力のうち』山崎語録』を思い知らされた試合でした。試合内容は、オフENSE・ディフェンスともに選手がこれからの方向を理解してきたという段階で、幼稚さはまだまだいっぱい残っています。

そして一ヶ月後、九州大会だ。これもまだまだ鶴鳴の力を私自身がかめないといい状態だった。

平成二年二月十九日付 九州高校春季選手権大会結果報告（準決勝 中村学園六三対五〇鶴鳴）

評判の方が先行しています。中村学園との試合は、手が届くところまで追いついたと思っただけですが出るという場面が二度ほどありました。まだ、松山・松尾・浜口の一年生トリオの力が読めません。練習試合に関する限り確かに強くなりました。でも、このような公式戦になるとひどいプレイが随所に出ます。選手達も練習試合と本番のできあまりの違いに戸惑っています。特に浜口は試合中の過緊張がひどく、フリースローの時などコチコチです。今にも泣き出しそうな顔をしてやっています。私にはその理由がわかります。彼女は自分の中学時代までの甘えとわがままに気付き、依存心をなくして立ち直らなければならないと思いついたのです。その自覚と不安に揺さぶられているんです。もう少し待ってやってください。

満足できない大会でしたが、ひとつだけいいことがありました。それは、岩永が顔を真っ赤にしてがんばり、フル出場したことです。岩永の心配の種は体力でした。シュートをポンポンと決めたらサツと引つめてやらなければ続きませんでした。出場時間が長くなったのに得点が減ったというのも変ですが、四〇分持ち堪えられたというのは大きな収穫だと思います。

以上原文のままの報告である。

中村学園との試合は、二年生は岩永と岡田、一年生が松山・浜口・松尾・山口の四人、計六人で戦っている。キャプテンの田端は一月六日の練習試合でやったふくらはぎの肉離れで出場できない。個々の選手を見てみると、浜口のスコアは、四〇分のフル出場で反則四、得点九。練習試合では常に二〇点上の得点をあげながら、公式戦ではまだ一桁の得点しか取れない状態が続いていた。

人間だもの

十二月に入ったある日。家に帰ると一冊の本が食卓の上に無雑作に置いてあった。

『にんげんだもの』 相田みつを 著

という本だった。詩集でもなく物語りでもなく、日常の人間のつぶやきが大きな字で書いてある変な本だった。私は食事をしながらその本をパラパラッとめくってみた。始めは、毛筆や太いペンで文字を書いてあるのが奇妙で、「フーン ちよっと変わってるな」とか「こんなに空間を使ってもつたいない本だな」ぐらいの印象を持って読んでいた。しかし、あるページに来た時、私は心臓が止まったかと思っ



『この花はおれが

咲かせたんだ』

土の中の

肥料は

そんな自己顕示を

しない

おれのような



あんなに世話を
してやったのに
ろくなあいさつも無い
あんなに親切に
してあげたのに
あんなに一生懸命
つくしたのに

のこ…
のこ…
のこ…

のに が出た時はぐち
こっちに のに がつくと
むこうは 恩に着せやがって
と思う

「俺のことじゃないか！」

私は頭から冷水をかぶせられたような衝撃を受けた。

「なぜ、この相田みつをとという人はこんなにも人の心がわかるんだ？」

「どんなことをした人なんだ？」

そう思いながら読み、読みながら、やるこゝろがうまくいかなくてイライラしている私にその本の中のことばがグサグサ刺さる。

いつの間にか食事をしてた箸は止まり、私の目も心もその本の中の文字に釘付けになっていた。始めは、その本の中に自分を投影させ、自戒と自己嫌悪が交錯していた。

私はグチは嫌いだ。グチは責任転嫁以外の何物でもないと思っっているから決して言わない。しかし、言わないだけで、

「あのやろつ、俺がこんなに苦労してるのも知らないで」

心の中ではいつもそう思っっているのである。

「君、口に出して言わないだけで、心の中ではいつもそう思っってるんだろ？」

相田みつを先生はその本の中から見事に私を見抜いている。

しかし、そのことに対して決して攻撃的ではなかった。

次に目に止まったのがこんな文章だった。



ぐちをこぼしたって

いいがな

弱音を吐いたって

いいがな

人間だもの

たまには涙をみせたって

いいがな

生きているんだ

もの

読み終わった時、私の目からは涙が溢れていた。周囲からあおられて功を急ぎ、自分を責め、見栄を張って生きていた自分がすなおな人間らしい自分になっていた。

「どんなに力んだところで、人間は人間以上になれないし、どんなにまずいことがあっても、人間以下にはならないんですもんね。これからは素直な気持ちでコートに立てそうです。相田先生ありがとう」

トンネル脱出

平成二年の三月下旬、ひまわり杯に参加した。

共同石油の主催で毎年開かれていた高校生のための催しで、顔なじみの高校が全国から集まって合宿し、強化試合をするのである。優勝チームにはトロフィーが与えられる。チームがずっと弱かったので長い間参加していなかったが、昨年からまた復活して参加させてもらっている。

しかし今年の参加には不安があった。昨年は今の主軸の松山や浜口がまだ中学生だったので、その将来性をはっきりと一年分のチーム力となってプレイに出てこななければならないのである。ところが、一〇月からこっち、ずっと評判だけが先行し、それに見合った力がついてこない状態が続いていた。

ひまわり杯は、鶴鳴が加わった時はすでに二日ぐらい過ぎていて、集まった指導者達も新しい話題が欲しくなってきた頃だった。だから、「イヨッ、優勝候補、いらっしやい」とかなんとか言ってみんなが囁きたてる。相手は気楽でいいがこっちは不安でたまらない。ところが、一目目が過ぎたところでみんなの表情もセリフもがらりと変わっていた。「すごいよ。こりゃ」。そのことにはもっぴゃかしくや脅かしはなかった。あるのは驚嘆のみであった。

個人的には松山が注目を浴びた。松山のやることなすこと全てが、見ていたみんなに、「あれで七七九センチなの？ヒエーツ」と言わせるように動きが鋭かった。チームはチームで、ひまわり杯に備えてこれといった特別な練習をしたわけでもないしやり方を変えたわけでもないが、長崎で練習していた動きがうそのように、この合宿での動きは滑らかなのである。特に、ハーフコートオフENSEの動きの流れが淀みなく、素速く、そこに集まっているみんなを驚かせた。

案ずるより産むが易し、とはまさにこのことである。私だけでなく選手もみなそう思ったに違いない。考えてみると、今までにもこんなことは数え切れないほど経験している。人のやることは不思議なもので、まったくうまくいかないことが、ある日ふとしたきっかけで突然できるようになったり、突然アイデアがひらめいたりするものだ。

長崎でのチームとは別のチームのように動けたのはおそらく、長崎から千葉へ、さらに自分達だけの練習だったのが全国から集った他校との交わりへと、環境が一変したことが大きな原因だろう。そして、自分たちでも予想をしなかった調子のよさが、そこに集まった人たちの驚きを誘い、それが鶴鳴の選手

たちを一躍ひまわり杯のメインステージに押し上げることになり、驚異の目で注目されるのが一気に選手たちに自信を与えてくれたのだと思う。

「よし、今度こそやれるぞ！」

私自身はもちろん、選手も皆そう思った。

長崎に帰って最初の公式戦は県下春季選手権大会である。その結果報告に私は次のように書いた。

平成二年四月二四日付 県下高校春季選手権大会結果報告（決勝 鶴鳴一〇一―対四五向陽）

新入生が入ってきて部員が増えました。だから、上級生でもエントリーしてやれない選手がいます。エントリーしてやれない選手達は、授業日は平常通り授業を受けなければなりません。春季選手権の最終日（二三日）月曜日）、七時三〇分頃学校に行くとは体育館でボールのはずむ音がします。見に行くと居残り組の二年生、松下・白浜・溝越がいつも通りの早朝練習で新入生に一生懸命シュートを教えていました。私はそれを見届けてから試合会場に行きました。そしてみんなに伝えました。

「学校では、朝練でモンヤヤーコ達が新入生にシュートを教えていたよ。俺たちこうして舞台上に立てる者はどんなに苦しいことがあっても、あいつらのことを忘れちゃいかんよな」

これは、私の掛け値なしの本当の気持ちでした。

試合は、故障者の田端（筋断裂）三ヶ月半（・岡田）（軽度腰部捻挫）一ヶ月（・岩永）（軽度腰部捻挫）三週間（・山崎）（軽度足関節捻挫）三週間（達のリハビリ後の試しの意味も含めた選手起用で試合を進めました。

その結果、田端は急がずにもう少しリハビリを続けてインターハイに照準を合わせます。本人も焦ると思いますが、必ず治るケガなので焦らないで治すことに専念したいと思います。残りの三人はもう大丈夫です。藤原は突き指で皮膚が裂けたので無理させませんでした。

バランス

ランニングスルーを思いついたことと、この春の遠征でどうにか光が見えてきたことで、気持ちに余裕ができ、私はチームづくりの何たるかが少し見えてきたような気がした。と同時にそれまでやってきたことが恐ろしくなった。今やっていることと比べてみれば、ついこの間までやってたことのすべてに無駄が多いのである。私の口から『調和』ということばが出るようになったのもこの頃からである。

「これはこうでなければならぬ！」そう断定的に物事を考えるのが私の特徴であった。しかし、プレイを教える時はバランスを強調していた。つまり、攻撃はインサイドとアウトサイドの調和、ランニングゲームとハーフコートゲームの調和、これが大切であって、いずれかひとつだけでカタをつけてやるうとするバスケットでは四〇分は保たないという考えである。だがそれも、経験と学習を積み重ねた上で頭の中で組み立てた理論であって、「これはこうでなければならぬ！」と、物事を断定的に考える私の性格的特徴が変わったわけではなかった。

ところが、この頃私の口から出る『調和』ということばは、プレイを教える上で理論上使っていた調和ということばに、私の心の奥底で感じたものが加わっていた。その『感じたもの』というのは『人間だから』という考えであった。

これまで、トランゼイションゲームとハーフコートゲームの調和とは言っても、そのハーフコートゲームの中で、「これはパスだ！」という場面でドライブを持ち込んだりすると「待て！」といってそれを厳しく咎めていた。要するに、何か事が起こると物事を決めつけてしまう性格ががぜん表に出てくる

のである。

それが、「あいつがあんなことをするには何か事情があったのかも知れない」と考えてみようとするように変わっていた。もしその時に、「わかってはいたけど、さっきいいパスをやったのにあの人がポロツと落としたのであたまに来て自分で行きまし」という答えが返ってきたら、それは否定しないのである。もちろん、そんなことをすべて認めるのではなく、「今この場面でそんなわがままがやれる時か！」と一喝する時もある。

大切なのは、人間だからこんなことをすることもある、人間だからこんなことを考える時もある、それをすべて否定するのではなく認めてやることである。即ち、人間のやることをある一定の方向だけに方向づけしようとしないうことだ。そういう生活をしている人間は、ストレスが溜まらないからいざとなつた時に柔軟な発想を生みだせる。

人間だからカツとなる時もある。カツとなつてしくじつたから反省して次には冷静になると努力する。カツとなつて燃えたから相手をギャフンと言わせて溜飲を下げる。燃え過ぎて暴れ回つたけれども徒労に終わったからばからしくなつて頭で考えようとする。それが人間らしさであつて、その人間らしさを否定し理論を優先させるとやることに味がなくなってくる。

人間だから…と考えるようになり、私はすべてのことを見直してみた。

- ・先のがわかる
- ・プライベートの時間を多く持てる
- ・個人の立場に踏み込まれない

・やることには全て許容範囲が認められる。

人間というものは、これらのことが自分の生活にバランスよく組み込まれているから、やることに全力を傾注し、よりよい結果を導くよう物事を追及していくのである。

私は先のがわかるようにするために、年度当初に年間スケジュールを選手に渡す。これは今始めたことではない。ずっと前からやっていることである。しかもそれは、おおざっぱな計画ではなく細かいものだ。例えば、四月当初にもらつた計画なのにその年の十二月の第二日曜日は休みだということがわかつている。そのように先のことを決めてしまうのは、年間の主な大会や遠征が行なわれる時期が毎年決まっているのでさほど難しいことではない。

また、休養がなければエネルギーは湧いてこないので休養日は設けるが、それもできるだけ月に最低二回は日曜日が休みになるような休養日を設けてやる。練習が休みであってもそれがウィークデーであれば、自分の自由になる時間は結局放課後の数時間でしかない。日曜日が休みになるとその日丸一日が自分のプライベートタイムである。この、プライベートタイムがあるということは次のエネルギーを貯えるのにとても大切なことである。

昔は、日曜日に練習を休ませるだのどんでもないことだった。日曜日こそが時間のたっぷりとれる稼ぎ時なのである。そのかわりに月曜日に時々休みにしてやる。しかも、ただ休みにするのが心配だから三〇分ぐらいミーティングをして帰す。それで休養させたりもりていたのである。しかし、それだと身体は休まつたかもしれないけれども気持ち少しも安らがない。

そんなことに気付いてからは、選手のプライベートタイムをつくつてやるためにずいぶん私は知恵をこぼした。休日には部員みんなで映画に行ったりレクリエーションをやったりすることが極端に少なくなつた。ミーティングも少なくなつた。選手のノート点検やカルテの点検も少なくなつた。レポートや感想文を書かせて提出させることもなくなつた。

みんなに言いたいことや確認したいことがあれば、それは練習時間の中で済ませる。よほどのことが

ないかぎり練習時間以外にそんなことで時間をとることはない。よく、管理だとかしつけどかいうけれど、練習時間以外にもこうしてバスケットにしばらくつけておくことを管理やしつけどと混同している指導者が多い。私はそのような指導者に警告したい。

プレイも私生活もみなバランスである。休養と活動、個人プレイとチームプレイ、プライベートとオア・ザ・チーム、すべてのことが一方だけを強調し過ぎると必ずどこかに歪みが出てくるものである。

3 パーセント

県高校総体は地元の民放テレビ局が放映することになった。

昨年までは、一月下旬に行なわれる春の全国選抜大会県予選を地元のNHKが毎年放映していたが、春の全国選抜大会が十二月に行なわれるようになり、しかもそれを、他の民放がスポンサーになって放映することになったのでNHKは退かざるを得なくなっていた。昭和五〇年に高校総体の放映をしたのが最初で、その後選抜予選に絞って放映し続けて昭和六三年の放映まで、十四年間にわたって続けられたバスケットのテレビ中継だった。

そんなわけで、これからはテレビ放映とは縁がなくなるのかと思っていたところへ、全日本対ソ連の国際試合と日本リーグの中継をやった地元の民放局が、「バスケットはおもしろい」といって本腰で取り組むことになったのである。

これは、監督という立場を離れて、協会で普及・強化の仕事を担当している私にとっては願ってもないことであった。その民放局の熱の入れようは大変なもので、私はしばしば勉強会にひっぱり出された。アナウンサーはバスケットのルールからまず勉強しなければならない。カメラはカメラの立場でバスケットボールという競技の特性を知らなければならぬ。私は勉強会の度に質問攻めに会った。また、こちらから出かけて行くばかりではなく、向こうからもスタッフが一〇人くらい揃って鶴鳴の練習を何回も見学に来た。

だから、初めて手掛けた日ソ戦の中継は、「初めてにしては上出来だ」と言えるくらいのもだったが、二回目の日本リーグ中継ではもう、何度もバスケットの試合中継をしたことのあるベテランの域に達していた。そしてその民放局は、単発ではなく毎年日本リーグが高校総体を中継するという方針を打ちだした。私は、これからもバスケットのテレビ中継が続けられるという喜びを感じたのと同時に、プロの仕事意識のすこさを感じさせられた。

このような経過をもって平成二年の高校総体はテレビで放映された。解説にはわざわざ共同石油の中村監督がかけつけた。画面はどうしても鶴鳴の松山・浜口を中心に追う。そしてアナウンサーの話題も鶴鳴の今後に焦点を絞ろうとする。

「中村さん、さあ、いよいよインターハイです。鶴鳴、どうでしょう？」
中村監督は答えた。

「そうですね、鶴鳴が今年全国優勝できるかどうかの確率は三パーセントあるかないかです。しかし、来年鶴鳴が全国優勝する確率は九九パーセントですよ」

例によって、大会終了後の結果報告である。

平成二年六月一八日付 県下高校総体結果報告（決勝 鶴鳴八八対二九長崎商）
結果報告遅れてすみません。

九州大会との間が無かったので九州大会の案内といっしょになってしまいました。

試合結果はともかく、ケガなしでとりあえず高校総体を終わりました。高校総体の前、三菱重工と試合をした時に「疲れてるなあ」と思いました。それで、高校総体前の練習は三日練習四日休みというペースでやりました。九州大会では無理してでも是非優勝したかったので、この時期にしか疲労を抜いてやる時がないと思ったからです。